

# 序

平城京は8世紀のはじめ、唐の長安を模してつくられたという古代日本における本格的な都市でわが国の遺跡のうちでも最も重要なものの一つである。70余年にして長岡京に遷都し、やがてその大部分が田園と化して近時に及んだ。その遺跡については近世末から研究が進められて来たが、近年に至って、従来行われて来た寺院跡の調査のほか、新たに羅城門址や朱雀大路址をはじめとする条坊址の発掘調査、さらに条坊内の邸宅址の発掘調査なども行われるようになり、ますますその重要性が明らかとなって来ている。

この報告書は昭和47年から49年にわたって行われた平城京左京三条二坊十五坪を中心とする地域の発掘調査結果を取りまとめたものである。同地に建てられていた奈良市立三笠中学校が移転し、その敷地に奈良市の新庁舎が建設されることとなり奈良市の要請にもとずき調査を行った。調査の結果、坊内の小路や坪の中の邸宅址の遺構などが明らかとなり、また数多くの遺物が出土し、古代都市の具体的な姿について多くの知見を得ることが出来た。

この調査結果からも明らかなように、平城京跡にはなおその地中に数多くの貴重な遺跡遺物が埋蔵されており、市街地と化した平安京跡と比べ今後の調査に期待すべき余地が極めて多い。しかし幸にして今日まで保存されて来たこの貴重な遺跡にも新しい時代の需要による開発が目を逐うて進められている。計画的な発掘調査と主要な遺跡の保存についての強力な施策の必要が痛感される。この報告書がそのための契機の一つとなることを念願してやまない。

昭和50年9月

奈良国立文化財研究所長

小川修三